

高等学校におけるダンスの 学習内容についての調査研究

塚本順子

1. はじめに

平成元年度の高等学校学習指導要領の改訂により、ダンスの学習については種目選択制の導入や、ダンスの学習内容についてもこれまでの創作ダンスとフォークダンスを中心にしながらも、地域や学校の実態に応じてその他のダンス（ジャズダンス・社交ダンスなど）も扱って良いこととなり、より多様なダンスに触れられるものとなった。それに伴いダンスの授業形態も男女共修で行われるところもあるなど、指導者にとっては学習内容の多様化にともない、より高度な指導力の発揮を迫られるものとなった。

このような学校教育現場におけるダンス学習の多様化・複雑化に対応し、指導者としてのさらなる力を発揮できるような指導力を身に付けるためには、どのようなものを提示すればいいのだろうか。

これらの問題を追求する手がかりの一つとして、現在の学校教育現場においてどのようなダンス学習が展開されているのかを知ることが必要であると考える。

そこで本研究では、天理大学体育学部生を対象に、高等学校におけるダンスの学習指導の現状を把握することを第一の目的とした。

2. 研究方法

天理大学体育学部生249名（男子168人、女子81人）を対象に、集団記入の形式で質問紙調査を実施した。

調査内容は先行研究等を勘案して構成した。主な調査項目は、高等学校でのダンスの授業形態・内容、ダンス及び武道の授業経験、ダンスの指導者・ダンスの授業・指導者への満足度、ダンスの授業での学習認識、ダンス（創る・踊る・観る）の好嫌度、今後のダンスの授業でやってみたいもの等であった。

3. 結果および考察

(1) ダンスの授業の有無と授業形態

高等学校時代にダンスの授業が「男女共にあった」と回答したものは20人（8.1%：以下括弧内数字はパーセンテージ）「女子はあった」が148（59.9）「どちらも無かった」79（32.0）であった。また、その授業形態についてみると、「男女共修」が17（10.5）、「男子のみ」1（0.6）、「女子のみ」144（88.9）であった。男女共にダンスの授業があったものについてみると、その授業形態が「男女共修」が17（89.5）「男子のみ」1（5.3）「女子のみ」1（5.3）で、

男女共にダンスの授業を行っているところでは、男女共修の授業形態が多かった。（ $P < 0.001$ ）

(2) 女子校・男子校でのダンスと武道

女子校ではダンスがあるというのが17（94.4）で、男子校ではダンスの授業は無く武道《柔道6（54.5）、剣道2（18.2）、その他3（27.3）》であった。（共に $P < 0.001$ ）

(3) 男女共にダンスのある高校の必修・選択

ダンスの授業が男女共にあった高校では11（55.0）が必修、9（45.0）が選択であったが、女子のみにダンスの授業があったところでは130（91.5）が必修で行われていた。（ $P < 0.001$ ）

(4) 高等学校時代に体験したダンスの学習内容

ダンスの学習内容としては創作ダンスが最も多く、次いでフォークダンス、エアロビックダンス、リズムダンスであった。

(5) ダンスの指導者

ダンスの授業の指導者の多くが女性であり、ダンス指導が女性教師に大きく依存していることがわかった。

(6) 授業の満足度と現在のダンスの好嫌度

高等学校時代におけるダンスの授業の満足度が高いほど、現在のダンスを「踊ること」「観ること」に対する好嫌度がいずれも統計学的に0.1%水準で有意に肯定的であることが明らかであった。

(7) 高等学校時代のダンスの指導者の熱心さと授業の満足度

高等学校時代のダンスの授業で指導した教師の指導が熱心であるほど、受けた授業に対する満足度が高くなった。（ $P < 0.5$ ）

また、ダンスの授業の満足度と学習者自身が感じる学習効果の多くにも関連があることがわかった。しかし、教師の指導の熱心さと学習効果には今回の研究では関連が認められなかった。

さらに、今後どのようなダンスを学びたいかでは、特定のダンスに集中するのではなく、比較的回答が分散していた。

4. まとめ

学習指導要領での種目選択制の導入やダンスの学習内容の多様化に伴い、さらなるダンスの学習内容および指導法の検討とダンスの教育的意義の位置づけのためにも、今後とも教育現場におけるダンス教育全般にわたる継続的な調査研究が必要である。